

諸帝国の崩壊とマイノリティーの出現について

西 成 彦

今日は多数お集まりいただき、ありがとうございます。「東欧」と言えば1990年代にはジャーナリズムの間でも取り上げられる頻度が高く、ついこのあいだまでは、ベルリンの壁の崩壊やチャウシェスク処刑の映像を昨日見たことのように語り合える学生が周囲にも少なくなかったのですが、このところは特にアフガニスタンやイラクやパレスチナに目が向けられることの殖えたぶん、「東欧」の記憶は影が薄くなってきました。ですから、この連続講座の参加者数についてあまり強い期待は抱かないようにしておりました。しかし、蓋をあけてみれば、それは杞憂に終わったと感じています。

今回の企画に関しては、文学部西洋史専攻の高橋秀寿先生にテーマの設定、人選などの具体化にあたっていただきました。全体の主旨については、配られた資料の中に刷りこんでありますから、お読みいただいていると思います。ただ、私自身も所長の立場からというより、ポーランド文学を専門とし、またワルシャワに3年暮らした経験のある一人として、今回の企画に対する強い思いを、この場を借り、言葉にしておきたいと思います。

今日お集まりの皆さんの中で、20世紀の東欧史に関する知識についてはばらつきがあると思いますので、まずは大雑把に歴史を振り返っておきたいと思います。私が語る限り、ポーランドに偏った語り口になるかもしれませんが、そこはご容赦ください。

「ポーランド分割」が18世紀終わりに起こります。その時期、東ヨーロッパ地域、我々がとりあえず冷戦時代の名残りから「東欧」と呼んでいる地域は、周辺の列強、「帝国」を名乗る諸列強のあいだで完全に分割されていました。ポーランドだけでなく、東ヨーロッパ地域の諸帝国による分割がほとんど完了するのが、18世紀終わりでした。それに対

してその直後、ナポレオンが到来し、今のEUに通じるような新しい形の「帝国」的「侵略」というか「併合」というか「解放」というか、そこは微妙なところですが、新しい動きが出てくるものの、それも志なかばで頓挫し、結果的にロシア、オスマン、オーストリア＝ハンガリー、プロイセン・ドイツによる支配が19世紀を通じて維持される。さらに、ギリシャの独立戦争以降、西側諸国（特に英国）の介入や干渉も強まります。その結果が第一次世界大戦であったと言ってもいいでしょう。19世紀の「東欧」は、そういう帝国支配の中で、民族意識・ナショナリズムの目覚めを経験するというふうに見るのが一般的な図式だと思います。

第一次世界大戦後、それまで戦ってきたナショナリズムが、国民国家という新しい枠組みを整える形で新しい展開を見せます。それは『全体主義の起原』で後にアーレントが語るように、「難民」としての「マイノリティー」を大量に生み出し、顕在化させる新しい局面の到来でもありました。ドイツの国家社会主義は、言ってみれば、こうした状況下で、難民問題の「最終解決」に向けて動き出したようなものです。そして第二次世界大戦後、人民社会主義体制下に置かれた東欧諸国では、「マイノリティー」の存在は問題としてはあらためて封印され、否認されて、新しい「帝国」内の状態に置かれるのです。独仏や英米の影響力を排除する形でのソ連による諸国民国家に対する間接統治です。そして、それ以降は記憶に新しいことでありますが、1989年以降の新しい「解放」（開放？）の時代が訪れます。しかし、この「解放」は、EUや合衆国といった資本主義経済の先頭を行く「帝国」との関係の結び直しのプロセスを一気に加速させる結果につながりました。「東欧」地域の「マイノリティー」は、今度はEU内の「マイノリティー」としてみずからを名乗

り、国民国家内のマジョリティーを構成する「諸国民」とともに新しい地位をめぐる交渉の場につかなければなりません。

「東欧」の20世紀史を振り返るとき、「国民国家」を単位として見る見方が一方にあるとすれば、逆にそれを押し潰したり、あるいはナショナリズムを煽る形で断続的に干渉を行ったりする「帝国」的な列強のせめぎあいとして捉えるという見方がある。「帝国」が乱立し、しかしその「帝国」が次々に崩壊していった後に、いつのまにかEU諸国やアメリカ合衆国の影響力が強まってきている。そういう歴史を「東欧」は生きてきた。今回の連続講座の簡単な見取り図を示せば、そういうことになるのだと思います。

この考え方は、第一回のテーマである「ロマ」や「ユダヤ」について、特によくあてはまります。自分たちの国家、ナショナリズムを持たずに、「帝国」的な枠組みの中でも、「国民国家」の枠組みの中でもつねに「マイノリティー」として生きてきた彼ら/彼女らにとって、東ヨーロッパ世界を席卷した「帝国」や「国民国家」は、どんなふうに見えていたか、感じられていたか？ 「ユダヤ人」や「ロマ」にとっては最悪の「帝国」と見えたドイツ第三帝国

が、その他の諸民族にとってはかならずしも「最悪」ではなかったかもしれない。しかし、その善し悪しは別にして、つねに超大国との薄氷を踏むような歴史的な摩擦と交渉の結果として今日の「東欧」の現実がある。このことだけは確かです。

ここで、なぜ「帝国」という言葉を多用したかと申しますと、今年、6月の連続講座で、我々は「帝国」をキーワードにすえた企画を組みました。アントニオ・ネグリとマイケル・ハートの『帝国』がいま話題を呼んでいることは皆さんもご存知でしょう。「帝国」とはかならずしも「皇帝を頂点にいただく国家」にかぎられるわけでも、かつての「植民地主義的な帝国」ともイコールではない。もちろんアメリカ合衆国一国のことでもない。今日のグローバル化を作動させている「超国家的な帝国」を真っ向から論の対象にすえ、その枠組みの中でしか抵抗を構想することはできないというのが、ネグリ=ハートの考え方です。今回の連続講座は、もちろん独立した企画ではありますが、「帝国」なるものをめぐる思考を鍛える場所としてもまた「東欧」は、史実の宝庫であるような気が私にはするので、そこを敢えて強調した上で、連続講座を始めるにあたっての口火を切らせていただきました。